



## 村落と都市を学ぶ

### ウォーミングアップ!

「人はどこに住むのか」と生徒に問いかけてみる。さてどんな答えが返ってくるのだろうか。

「●**集落の成立条件**」の設問1では、先の問いをふまえて、集落が立地する条件について考察させる。まず設問1(1)では、小地形の単元の復習を兼ねて地形図を判読させる。Aは扇状地、Bは台地、Cは氾濫原であることに気づかせたうえで、設問1(2)の着色作業を通じ、集落の立地をとらえさせる。設問1(1)(2)をふまえ、設問1(3)では集落がどのようなところに立地しているのかを考察させる。Aの扇状地では、湧水が豊富に得られる扇端に集落が立地すること、Bの台地では湧水がみられる台地のへりに集落が立地することに気づかせたい。乏水地となるBの台地上では、宙水が得られるところを除いて集落は形成されてこなかったことを補足する。Cの氾濫原のような沖積平野の河川沿いでは、洪水を避けるため微高地である自然堤防上に集落が立地していることを読み取らせたい。以上のように、水を中心とする自然とのかかわりが、古く集落の立地を規定してきたことを理解させる。

設問2では、景観写真を用い、集落の立地は、崖上や丘上などの外敵からの防御に有利なところ、海岸付近や河川合流部のような水陸の交通・物流に便利なところといった社会条件とも深く関連していることを理解させる。

### ステップアップ!

世界にはさまざまな形態の村落や都市があり、機能も多種多様である。日本との比較を念頭におきながら、グローバルな視点で、それらを概観させる。また可能な限り、それぞれの村落や都市がもつ物語を紹介できればと思う。

「●**村落の形態**」の設問3では村落の形態について説明文と景観写真を関連づけて理解させる。村落の形態は、家屋の分布形態によって集村と散村に大別できる。集村は、伝統的に共同意識の強かったヨーロッパに広く分布する。ここでは、生徒にとってあまりなじみのない円村について取り上げたい。中央に広場や教会があり、それを取り囲むように民家が並ぶ集落の形態に驚く生徒は多い。円村の成因には諸説あるが、円村がみられるドイツ北部のエルベ川下流域はゲルマン人とスラブ人という異なる民族の居住域の境界に分布すること、フランス南部のラングドック・ルシヨン地方は13世紀初頭にアルビジ

ヨワ十字軍によって制圧された過去をもつことなどから、外敵からの侵攻を防ぐために円形となったという説が有力である(加賀美, 2009)。

一方で、散村については、その典型例としてアメリカ合衆国のタウンシップ制による開拓の歴史を紹介したい。18世紀後半からタウンシップ制の導入が進み、公有地は分割され、1農家につき800m四方の方形区画が割り当てられた。結果として、広大な農地を背後にもつ農家が散居する村落が形成された。19世紀後半、西部の乾燥地域にたどり着いた開拓者たちは、水の得られる河川沿いの土地を選んで入植したが、河川から離れた土地では水の確保が困難なため、入植の障害となっていた。こうした事態の打開策として、風力を利用して揚水する風車が普及した。家屋のそばや、広大な農地にぼつりとたつ風車に出くわすことがあったならば、それは、開拓者たちが水を得るための戦いに勝利を収めた証なのである(矢ヶ崎・斎藤・菅野, 2003)。

「●**都市の形態と機能**」の設問4(1)(2)では、世界の都市形態について概観させる。これらは、センター試験2015年度地理B本試でも出題されたタイプの設問である。都市形態は、街路網や市街の区画、建物の配置などによって特色づけられる。一般に、自然発生した都市の道路は不規則で狭く、市街地も雑然としているが、計画的な都市は規則正しい街路網で、市街地も整然と区画されていることが多い。

ところで、都市をめぐる論考は数多あるが、例えば丹羽(1998)は、「都市としての魅力の中心」として、「細く折れ曲がった路地と、そこに群がる半ば老朽化した商店や民家」「裏街の一画にひしめきあうように集まる居酒屋の群れ」「スラム、あるいは繁華街の場末、色街、悪所」を挙げている。しかし、こうした空間を、行政による都市整備や再開発は、「美しい」「美化」などと銘打って、きわめて画一化された空間へと置き換えてしまう場合がある。その際、差別的な環境浄化が推進されることもしばしばである(加藤, 2012)。整備の進んだ地に足を踏み入れたとき、眼前に広がる無機質な風景が、まさに「魂を抜きとられてしまった生き物」のように映ってみえるのは筆者だけではないように思う。

設問5では、世界の都市が有する機能についてそれぞれ概観させる。なかでも観光保養都市を例に、都市機能と都市を取り巻く状況について概説したい。世界屈指の

海岸保養地であるニースやカヌス、モナコといったコートダジュール地方についてみると、ホテルやカジノ、公園や街路を一年中美しい花が彩り、観光客を魅了し、映画祭やF1レース、花のカーニバルなど国際イベントも目白押しで、花の需要がますます増加傾向にある。花の大消費地を間近に控える地中海地方では、伝統的な地中海式農業はほとんどみられなくなった代わりに、丘陵地の斜面にビニールハウスが広がり、アイリスやバラ、カーネーションなどの花卉栽培という市場志向の農業が中心になっている（加賀美，2011）。

また、ドイツの温泉保養地についてみると、製塩所が併設されており、この施設を囲んで並ぶ椅子にじっと腰かけている人々のようすを目にする（加賀美，1995）。この風景に不思議がる生徒たちに、塩水を含む非常に微細な飛沫を吸入することで、気管支などの呼吸器の炎症がやわらげられたり、リラックスして過ごすことで身体の安定につながったりする、れっきとした療養・保養手段なのだということを紹介したい。

### ジャンプアップ！

「●都市内部の機能と構造」の設問6（1）（2）では、図3を用いて地代を切り口に都市の内部構造を把握させる。都心に近いほど交通の便がよく地価が高くなるため、高い地代を払うことが可能なオフィス街・商業地が立地することが多い。都心から少し離れると、次に高い地代を負担できる集合住宅や高級住宅が多くなる。その外側には、広い土地を必要とする工場や倉庫などもみられるようになり、さらに郊外になると、最も地代の負担力が低い農地が多くなることをまとめさせたい。

「●日本の都市」の設問7（1）では、日本とドイツの政治・経済機能の分布から、日本は東京・名古屋・京阪神の三大都市圏に人口が集中していること、なかでも東京は中枢管理機能や資本の集中・集積の度合いがとくに高いことに気づかせたい。東京への一極集中の弊害として、現在の日本では都市と農村との間ばかりでなく、大都市と地方都市との間に格差がめだってきている。

設問7（2）では、本校が位置する佐賀県唐津市（以下、唐津）を例に、地方都市が抱える問題と解決に向けた取り組みを具体的に描写してみたい。

昨今、全国の地方都市で経済の停滞が課題となっている。唐津も例外ではなく、人口減少・少子高齢化の進展、大型商業施設の進出による商店街の空き店舗が増加している。こうした事態を受けて、近年、唐津では中心市街地にどのように人を呼び込み、活気を取り戻すかという課題が議論されてきた。2010年3月23日に「中心市街地活性化基本計画」の認定を受け、唐津の中心市街地のまちづくりを総合的に推進する組織「中心市街地活性化協議会」の実働組織として「いきいき唐津株式会社」（以下、

いきいき唐津）が設立され、「商業開発」「コンサルタント」「文化教育」「イベント・情報発信」を柱に活動を展開している。以下に、「いきいき唐津」の中心市街地活性化に向けた活動の一端を紹介したい。

まずは、「いきいき唐津」が主催するイベントについてである。「唐津にきつとあるお気に入りの場所に出会うことができる」と人気の街歩き「歩唐<sup>あるから</sup>」では、「唐津くんち」「唐津焼き」といった地域文化や、「建物・偉人」「城下町」といった地域史をたどるコースなどが設定されており、市内外から多数の参加者がみられる。このほかにも、焼き物の街ならではの「唐津やきもん祭」では、商店街の空店舗を陶芸家のギャラリー兼販売所として利用することが試みられている。これらのイベントは、唐津の魅力をもっと紹介するだけでなく、商店街に活気は戻るとして、歩行者が増えることが期待され、そのきっかけづくりとしても機能しているといえるだろう。

次に、市民の声を取り入れた活動についてである。「唐津に“スターバックスコーヒー”のような喫茶店をつくってほしい」という要望を受け、2011年に「Odecafe」というカフェがオープンし、地元客や観光客で連日にぎわいをみせている。料理に使われる野菜はもちろん唐津産だ。また、「今から20年ほど前に映画館が閉館してしまった唐津でもう一度映画が見たい」と寄せられた意見から、「唐津シネマの会」という団体が立ち上がり、毎月の上映会やイベントが目白押しである。映画の内容や上映スケジュールなどは、「今、唐津がおもしろい、今から唐津がおもしろい」をコンセプトに発刊されているフリーペーパー「IMAKARA」で、「唐津の今を彩る<sup>アート</sup>芸術や文化」とともに発信されている。

以上のように、「唐津を訪れたい、住みたい」とまちづくりが、「いきいき唐津」を中心に着々と進められているのである。

唐津を盛り上げようと奔走している人たちの中には、UIターンを経験した移住者が意外なほど多い。筆者も唐津に暮らす移住者の一人として、何らかの形で地域づくりに貢献できればと思う。住民一人ひとりの草の根の活動こそが、地方都市再生への始まりの一歩だと確信している。

### 参考文献

- ・加賀美雅弘（1995）「アメニティのための森林浴・再考」『日本生気象学会雑誌』32巻1号 日本生気象学会
- ・加賀美雅弘（2009）「フランス南部の円村」『地理・地図資料』2009年度2学期号 帝国書院
- ・加賀美雅弘編（2011）『世界地誌シリーズ3 EU』朝倉書店
- ・加藤政洋（2012）「浄化される空間—丹羽弘一「支配—監視の空間、排除の風景」論に寄せて—」『空間・社会・地理思想』15号、大阪市立大学地理学教室
- ・丹羽弘一（1998）「支配—監視の空間、排除の風景—「住むこと」から「居住地」へ—」荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』古今書院
- ・矢ヶ崎典隆・斎藤功・菅野峰明（2003）『アメリカ大平原—食糧基地の形成と持続性—』古今書院